子守歌の現在

高　松　晃　子

１．はじめに

１．１　目的

本論文は、現代日本の家庭内での子育てにおいて、「子守歌」、すなわち、子どもを落ち着かせ、眠らせるための歌がどの程度歌われているかを明らかにするとともに、そのレパートリーの実態を検証するものである。

子育ては重労働である。ことに、核家族化が進み、子育ての負担がひとりの大人に集中するような現状においては、少しでも手間を省き、効率よく子育てをしたくなるのは当然のことである。そんな親の気持ちに答えるための、さまざまな育児用品が開発されている。中には、親に代わって寝かしつけをする、「ベビーメリー」や「子守歌 CD」、さらには、胎内音が内蔵されたぬいぐるみなどというものまで商品化されている。寝かしつけは、その子どもにもよるが、育児の中でももっとも時間がかかり、かつ精神的負担の大きい部分であるから、それを CD やぬいぐるみが代わってやってくれたらどんなに楽になるだろう、と考える大人は多いだろう。そういった商品の氾濫により、一般的には、育児労働そのものの負担は軽減されたかの印象がある。

ところが、実際に子育てをしてみると、育児用品は意外に非力である場合も多い。寝かしつけ CD も胎内音内臓ぬいぐるみも、ぐずって泣き叫ぶ子どもの前では無力なのである。そこで、抱き上げて揺するという古典的な方法に回帰せざるを得ないのだが、そこで果たして歌が出るのかどうか。世間の目は、とかく現代の親たち対して批判的なようで、特に子育て終了世代から見ると、いまの親は子守歌も歌わずに子育てをしてけしからぬ、ということらしい。たとえば、子守歌研究家の右田伊佐雄は、次のように述べている。「わが子のためにうたってやったらと思うのだが、それもしない母親が今は圧倒的に多いのである。母親たちに言わせると、いまは赤児がよく眠ってくれるから子守歌をうたう必要はない、とのことだ。」(右田1991：259)。このコメントが、どのような調査を経て出されたものかは不明であるが、筆者の実感としては、乳児というものはいまも変わらず寝ないものだし、寝かしつけという単調な労働においては、歌を歌って気持ちを紛らすのはよい方法である。本稿ではまず、上のようなコメントに対して疑念を呈すること

から出発し、CD の売り上げに隠された、人間の肉声に耳を傾けてみたい。

１．２　先行研究と本論文の位置づけ

日本における従来の子守歌研究は、大きく分けて次の４つのアプローチの仕方があった。すなわち、（１）多くのサンプルを収集し、地域別に分類して提示するもの、（２）音楽的構造を解明しようとするもの、（３）歌詞を読み解こうとするもの、さらに（４）子守歌を通して子育て文化を歴史的に検証するもの、である。（１）の試みで代表的なのは、日本放送協会編の『日本民謡大観』（日本放送協会：1955－1980）で、これは、子守歌を含む民謡を地域別に集大成した利便性の高いコレクションである。柴田南雄による『音楽の骸骨のはなし－日本民謡と12音音楽の理論』（柴田：1978）に代表される（２）のタイプの研究では、子守歌はたいがいわらべうたと同様の扱いを受け、旋法よって分類されたり、中心となる音について論じられたりしている。（３）については数多くの研究が見られるが、右田伊佐雄の『子守と子守歌－その民俗・音楽』（右田：1991、特に第２部「子守歌の種類」）でよくまとめらている。ここで得られる知見のひとつは、日本の子守歌の歌詞が、子どもをいつくしむ優しい感情を表現する一方で、「はやく寝ないとなになにする」といった、ある種脅迫めいた一面をもつことである。そしてそれは、（４）のタイプの研究に深く関わってくる。（４）では、江戸時代中期から昭和初期にかけて子守り労働を担っていた、「守り子」[(1)]という特殊な存在に着目し、その過酷な労働の実態を射程におさめつつ、日本の過去を検証しようという姿勢が顕著である。渡辺・松沢：1979や松永：1964などがこのタイプにあたる。これらのアプローチはそれぞれ、音楽学的、文学的、民俗学あるいは社会学的研究ということができ、ときにはこれらを縦断する視野を持つことが必要になることから、子守歌研究は広く学際的研究の対象となりうる[(2)]。

これまでの研究により、各地に伝承されてきた子守歌の一部は記録され、消失を免れた。庶民に伝わる日本の伝統的な歌の構造も、説明することができるようになった。それぞれの地域の子守歌の歌詞が、どの程度互いに影響し合ってきたか、同じようなモチーフがどの程度見られるのか、など、歌詞についての興味深い研究成果も得られた。そして、守り子研究を通して、日本の子育ての歴史が決して明るく平穏なものではないことも明らかになった。しかしながら、こうして研究成果を俯瞰してみると、現在に至ってもなお、過去の痕跡を求めて奔走し、伝統が失われていることを嘆くという、既成の学問領域にありがちな閉塞感を否定することはできない。

伝統的な子守歌が失われてしまったとしても、子守歌研究はそこで終わりではない。むしろ始まりと言うべきだろう。民族音楽学の成果を待つまでもなく、労働のために歌が用いられるのは、ごく自然なことである。現在の子育てに歌が用いられていると仮定したならば、どのようなレパートリーが選択されているのだろうか。なぜ、それらの歌が「子守歌」というジャンルに収まりうるのだろうか。子守歌の「消滅の語り」に取り込まれるのではなく、「生成の語り」に寄与すべく、現状を積極的に把握すべきであろう。

以上の点から、本稿においては、「子守歌」を従来のレパートリー（たとえば《江戸の子守歌》

や《ゆりかごの歌》)に限定することなく、子どもを眠りにつかせるときに用いられる歌、と解釈する。つまり、ジャンルの枠にとらわれることなく、歌の機能に着目するというのが、筆者の基本的な考え方である。

１．３　方法論

まず、保育担当者の声をなるべく多くすくい上げるために、子守歌の実態を問うアンケート調査を行った。本稿は、主としてその調査の結果と分析である。アンケート調査の期間は、2001年10月から2002年３月までの半年間で、対象は、この期間に福井市保健センター、福井県宮崎村保健センター、埼玉県朝霞市保健センターで行われた１才６ヶ月児健診に来た子どもの保護者である[(3)]。当日は混乱が予想されたため、その場で用紙を配布し、後日返送の形をとった。そのため、配布数1,169部のうち有効回答は337件であり、回収率29%というやや低調な結果となった。

２．アンケートに見る子守歌の現状

２．１　調査の概要

今回の調査は、前述したように、伝統的な子守歌の痕跡を求め、それを保存することを意図したものではなく、現代の子育て環境における歌のあり方を明らかにしようとしている。おそらく、新しいレパートリーが数多く提示されるであろうという仮説の下、それらを多角的に検討できるよう、歌っている身体のあり方や、歌い手の精神的な状態など、歌そのものから一見はずれるような質問項目も設定した。ここではまず、調査の概要を掲げ、設問の意図を述べていこう。なお、質問紙の全文は、本稿の末尾に付録として掲載する。また、文中でアンケートのコメントを引用する際に付した、＃で示す数字は、回答の通し番号である。

（１）あなたは、お子さんを寝かしつけるときに、歌を歌ったことがありますか？（はい・いいえ）

……「子守歌」という言葉をあえて出さないことによって、歌うという行為そのものに目を向けてもらう。

いいえと回答した人は（６）へ。

（２）それは、どのような状況でしたか？　これまで経験した状況をすべてお書きください。

ａ．寝ぐずりで泣いているお子さんを立って抱っこして／ｂ．寝付きそうなお子さんを立って抱っこして／ｃ．寝付きそうなお子さんを寝かした状態で／ｄ．寝付いたお子さんに対して／ｅ．その他

……子守歌は労働歌であるから、身体の動きに密接な関係があるはずである。

（３）そのときのあなたの気持ちを一言でいうとどんな感じでしたか？

……この回答と選択される歌のレパートリーに何らかの関連性があると予想した。

（４）そのとき何という歌を歌ったか教えてください。いくつでも結構です。

……現代版子守歌のレパートリー調査。

（５）なぜその歌を選んだのでしょう。あてはまるものに○をつけてください。

ａ．無意識のうちに／ｂ．その歌が好きだから／ｃ．子守歌だから／ｄ．その他

……「子守歌」というジャンルに、選曲の際の拘束力があるかどうか検証するため。

（６）あなたご自身は子守歌を歌ってもらった記憶がありますか？（ある・ない）　「ある」と答えた方は、曲名がわかれば教えてください。

……伝承の実態を知るため。

（７）日本の伝統的な「子守歌」で、ご存じの歌がありますか？（はい・いいえ）　「はい」と答えた方に伺います。

（７－１）曲名を教えてください（いくつでも）。その中で、１番だけでも歌詞を付けて歌えるものがあれば、○を付けてください。

（７－２）その歌をどこで知りましたか？　誰に教えてもらいましたか？

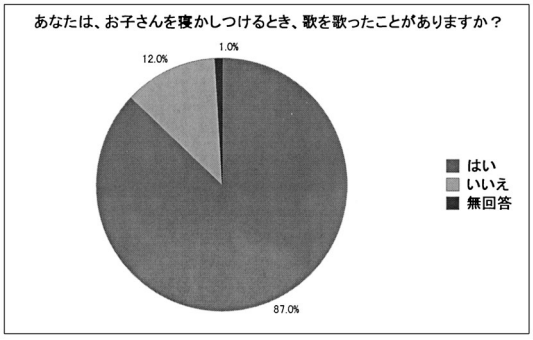
……伝統的なレパートリー[4]がどの程度継承されているか知るため。また、現代の親世代が、どの程度伝統という認識をもっているかを知るため。

２．２　調査の結果

ここでは、上の調査項目に対する結果を示し、そこから読みとれる事柄や、問題にすべき点について簡単に述べる。

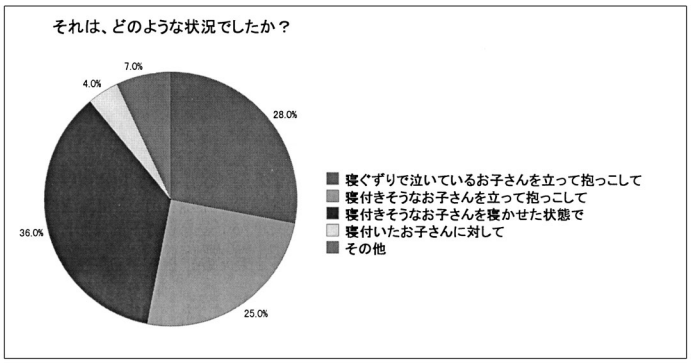
（１）あなたは、お子さんを寝かしつけるときに、歌を歌ったことがありますか？

「はい」という回答が87％と非常に多いが、そもそもこのアンケートに答えようと思った人は、歌うということにそれなりの関心がある人だと思われる。アンケートを返送しなかった70％の人がもしも全員関心がないのだとすれば、この数字は、現実以上に高いものである可能性がある。



（2）それは、どのような状況でしたか？

立って抱っこしている状況が過半数を占める。子どもを抱いているときの常として、体は左右に揺れる。そのリズムが、歌の選択にどのように関わってくるのか。



（3）そのときのあなたの気持ちを一言で言うとどんな感じでしたか？

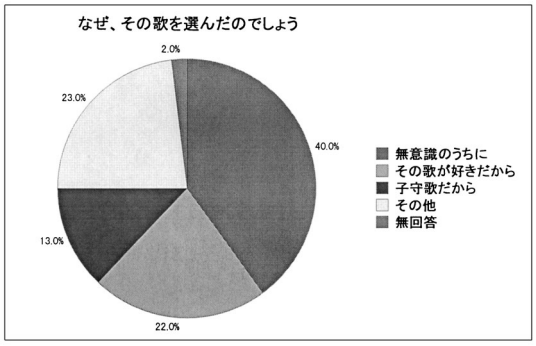
後でもう一度述べるが、これは子どもの状態に左右されることが伺える。子どもがすやすやと寝付くようなら、安定した、優しい気持ちになることができるが、逆にぐずってなかなか寝付かない状況では、とにかく早く寝てもらいたい焦りの感情が生まれ、時には子どもがうっとおしく思われることもあるようだ。

（4）そのとき何という歌を歌ったか教えてください。

回答が多かった順に10曲を掲げる。（　）内数字は回答数である。①《江戸の子守歌》(96)　②《ゆりかごの歌》(76)　③《ぞうさん》(50)　④《七つの子》(48)　⑤《犬のおまわりさん》(30)　⑥《シューベルトの子守歌》(28)　⑦《どんぐりころころ》(26)　⑧《大きな古時計》(24)　⑨《ゆうやけこやけ》(20)　⑩《森のくまさん》(19)

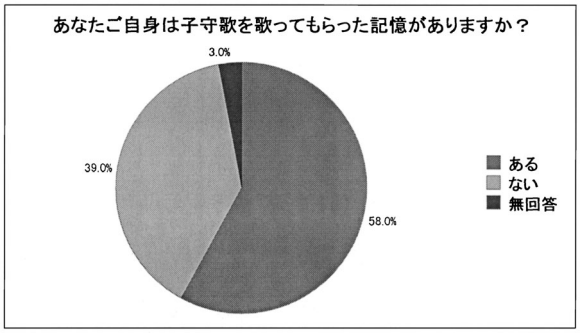
（5）なぜその歌を選んだのでしょう。

「無意識に」という回答が40%であるのに対し、「子守歌だから」と答えた人は13%にとどまり、選曲の際、ことさらに子守歌というジャンルにこだわらないことがわかる。



（6）あなたご自身は子守歌を歌ってもらった記憶がありますか？

ここでは「ある」という回答が過半数である。

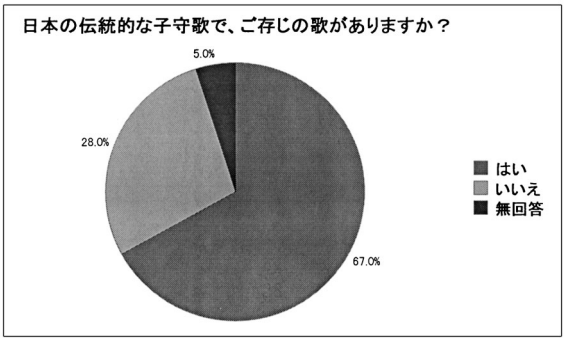


（7）日本の伝統的な「子守歌」で、ご存じの歌がありますか？

「はい」という回答が67%ではあるが、曲名を尋ねると、《モーツァルトの子守歌》や《ブラームスの子守歌》などの外国曲が出てきたり、《赤とんぼ》や《犬のおまわりさん》など、伝統的な子守歌という範疇に含めるには無理のある曲が数多く挙げられている。《江戸の子守歌》や《五木の子守歌》などのような、この質問に対して期待される回答を挙げた人は、「はい」という回答者の半数に満たない。

また、その歌をどこから得たかとの問いに対しては、ほとんどが母または祖母という回答であった。

地域性は全く見られない。福井県に伝わる子守歌に、「ねんねこや　おべろりや」で始まるものがあるが、それを挙げたのはわずかに２名であった。



２．３　結果から見えてくるもの

今回の調査では、回収率がやや低調だったものの、現在も寝かし付けの際に歌が歌われていることがわかった。しかし、そのレパートリーを見ると、童謡[5]や、テレビで放送される歌が多く用いられており、日本の伝統的子守歌は、《江戸の子守歌》を例外としてほとんど見られない。

この点から、まず、ジャンルとしての「子守歌」の陰は薄くなり、レパートリーの転換が生じたものの、「子守りのために歌う」、というシステムは継続していることがわかる。そもそも、歌い手の側に「伝統的」という概念が、時には「日本の」という意識さえもが欠如しているため、今後日本の伝統的な子守歌が復権することはかなり困難であると思われる。

この結果から見ても、失われつつある歌を回復する努力は続ける一方で、現在の歌のあり方を大事にしていくべきだろう。「正しく歌えない」「歌詞を知らない」という理由で、子守歌を歌わなくなってしまうことは、子どもにとっても大人にとっても残念なことである。

３．現代の子守歌

先に見たように、現在、子守歌というジャンルの存続が危うくなってはいるが、子どもを寝かしつけるときに歌うというシステムは保たれているとすれば、従来の「子守歌」に代わって子どもが耳にしている歌はどのようなものだろうか。

３．１　大人文化から子ども文化へ

まず、今回挙がったレパートリー全体の傾向について考えてみよう。アンケートの質問（４）で、回答者は様々な現代版子守歌のレパートリーを挙げている。上位10曲は既に掲げたが、続く10曲は次のようなものである。《ちゅうりっぷ》、《きらきら星》、《おうま》、《赤とんぼ》、《海》、《ちょうちょう》、《小鳥のうた》、《あめふりくまのこ》、《めだかの学校》、《こいのぼり》である。

筆者は当初、レパートリーに関して、伝統的な子守歌はほとんど挙がらないことは予想していたが、もう少し「大人の歌」が出てくるのではないかと考えていた。その根拠は、現代の子守歌は大人が自分自身へ向けた応援歌ではないかという仮説である。子育て労働のうち、もっとも時間がかかり、体力が必要な寝かしつけは、歌でも歌っていないと間がもたない、歌うのなら自分の好きな歌を歌ってすっきりしたい、と大人は考えるのではないか、と予想したのである。そして、筆者自らの子育て経験と、母親仲間との交流から得た感触から、いわゆる J-POP のような曲が子守歌の地位についているのではないかと、勝手に考えていた。それはもしかすると、数年前に斜め読みをした子育て雑誌に、子育てストレスを発散するため、子どもを抱いて大きな声で「モーニング娘。」の歌を歌うという母親の話が掲載されていたのが、印象的だったというだけかもしれないが、子どもがいてカラオケにも行けない若い母親が、家をカラオケボックス代わりにして、自分への応援歌を歌うということは大いに考えられると思っていたのである。しかしながら、実際に J-POP を歌うという人はきわめて少なく、ほんの３，４例にすぎなかった。その代わりに歌われているのが、いわゆる童謡やテレビの子ども番組で放送される歌である。

考えてみれば、寝かし付けの場で、ノリの良いポップスを歌うということは、肉体的にかなり負担が大きい。アンケートの質問２－ａによれば、子どもを立って抱っこしながら歌うという状況が、半数以上に見られる。しかも、寝かしつけは、大人の疲労がピークに達する夜や、家事その他のさまざまな用事が気になる昼間に行われるものである。したがって、大人としてはできる

だけ体力を温存したい。この状況では、音域の広い歌やリズムの複雑な歌はまず無理である。また、歌詞を思い出すのに労力のいる歌も好ましくない。それゆえ、音域的に妥当でリズムが単純、しかも歌詞が覚えやすいものが労働歌としてふさわしいわけである。この条件を都合良く満たすのは、童謡やテレビの子どもの歌である。J-POP では重たすぎるのだろう。

実は、子守歌を歌う大人の心中は、決しておだやかではない。調査の問い（３）で、歌っているときの気持ちを質問したが、「とにかく早く寝てほしい」といらいらした様子を見せている回答が、歌を歌う人全体の38％あった（111人）。そのうち21人は、子どもがおとなしく寝付きそうなら「優しい気持ち」、ぐずっていたら「早く寝て」という２つの心情を併記していたが、いずれにしても、寝かしつけ労働に精神的苦痛を覚える大人は多い[6]。そんなとき、歌うことで自分の気持ちを落ち着かせ、自分を元気づける。子守歌は、子どもへの語りかけであると同時に、元気に応援歌を歌う気力が残っていない大人のための、精神安定剤である。伝統的な子守歌を知らない現在の子育て世代にとって、ポップスが選択肢からはずれた場合、残るレパートリーは童謡や子どもの歌になるのだろう。

しかしながら、伝統的な子守歌でもポップスでもなく、童謡が選択されるということには、子育ての歴史において、案外重要な意識変化が隠されているようにみえる。従来の子守歌は、基本的に大人文化であり、歌詞の内容もそのようにできていた。たとえば、代表的な守子歌である《五木の子守歌》では、「おどんが打死んだちゅうて、誰が泣いてくりょうきゃ、裏の松山蝉がなく」と歌われ、守り子は、自分の背中におぶさっている赤ん坊に聞かせるというよりは、一方的に自分のつらい身の上を嘆いている。また、寝かしつけ歌で有名な《江戸の子守歌》では、「ねんねんころりよおころりよ、ぼうやはよい子だねんねしな」と歌われ、明らかに大人が大人の立場で子どもに歌ってやるものである。筆者が経験上知っている、若い母親が子守歌代わりにポップスを歌うという現象も、基本的には大人文化である。

ところが、今回の調査で挙がってきたレパートリーの多くを占める童謡やテレビの歌は、原則として子どもが歌うため、あるいは大人が子どもの目の高さで歌ってやるために作られたものであり、子ども文化の範疇にある。子守り、寝かしつけ、といった言葉に見られるように、子どもを眠らせるという行為が大人の労働として捉えられていた時代から、子どもの目線に立った優しい眠りを求める時代へ変化したということだろうか。

３．２　労働歌としての選曲－２拍子に込められた意味とは

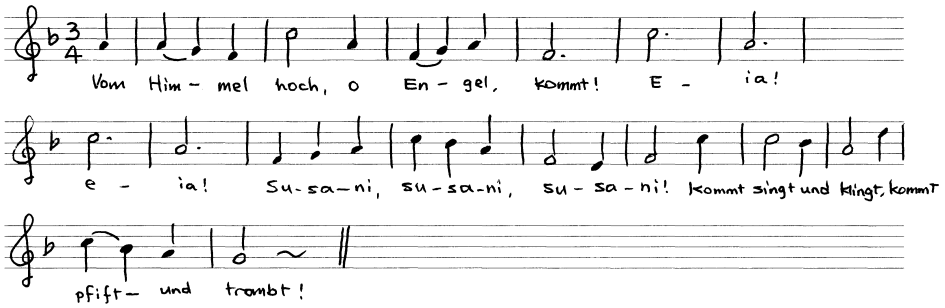
子守歌を労働歌として捉えた場合、もうひとつ忘れてならないことは、歌うときの身体の使い方との関係である。前述のように、日本人が寝かし付けを行う場合、立って抱っこするあるいはおんぶするというのが一般的である。その場合、不動のまま直立し続けることはありえない。たいていの場合、大人の体は、子どもを時々揺すり上げながらゆっくりと左右に揺れ、子どもの体は左右と、わずかだが上下にも揺れる。そこで身体が作り出すリズムは、２本足で行う労働という理屈から言えば縦ノリの２拍子であるが、感覚的にはほとんど１拍子である。多くの場合、子

どもを抱いている大人は、子どもの背をとんとんと軽く叩きながら、自らリズムを取っている。その状況で歌えるのは、必然的に、身体のリズムに合った歌になるはずである。

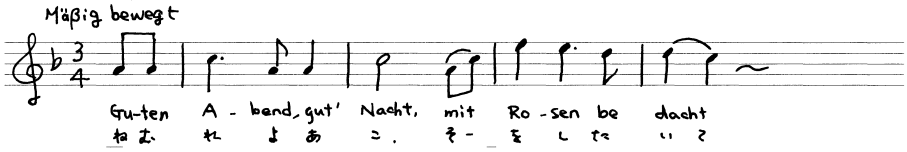
ここで思い出しておきたいのは、日本が手本とした西洋芸術音楽の伝統から生まれた子守歌は、通常６拍子または３拍子で、前者で言えば♩♪♩♪というリズムを基本としていることである。このリズムは、まちがいなくゆりかごの動きを模したものである。たとえばドイツでは、18世紀まで、クリスマスの真夜中のミサで、キリスト生誕を象徴するゆりかごの儀式があり、そこで使用された音楽が３拍子系であった。たとえば、譜例１は、17世紀のドイツで行われたクリスマスのミサに用いられた「ゆりかご歌」で、これは𝅗𝅥♩を中心に単純なリズムで構成された、典型的な３拍子の作品である。この慣習が、西洋芸術音楽における子守歌の原型を作ったといえる(7)。つまり、西洋の子守歌は、２小節で一往復するゆりかごのペースであり、基本的に横ユレの音楽である。

一方、日本の子守りは日本足で立って２拍子で行われるもので、３拍子の西洋の子守歌は、本当は労働する身体にそぐわないものである。たとえば、子どもを抱いて背中を叩きながら、《ブラームスの子守歌》を歌おうとすると、１拍を単位にすればたいへんせわしなく、１小節を単位にすれば間延びしすぎて体が余る。つまり、子どもを抱いて背中をたたく行為が、♩＝60ぐらいで行われるものとすると、《ブラームスの子守歌》は、♩＝96ぐらいで歌われるのが普通であるから速すぎ、かといって１小節を振幅の単位としてしまうと、𝅗𝅥♩＝32となって遅すぎるのである（譜例２）。

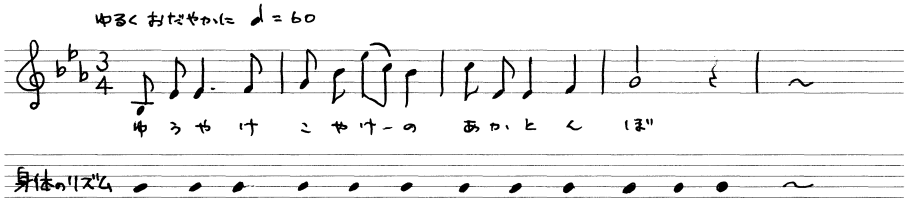
譜例１　《Vom Himmel hoch, o Engel, kommt！》



譜例２　《ブラームスの子守歌》冒頭部



譜例３　《赤とんぼ》冒頭部と身体のリズム



それでは、アンケートでは３拍子の歌が挙がっていなかったかというと、そういうわけではない。たとえば、《赤とんぼ》は３拍子である。しかし、この歌は赤ん坊を抱く身体にはしっくりくる。その理由は、次のような点にあるだろう。《赤とんぼ》は、同じ３拍子でも、《ブラームスの子守歌》とはリズム割りが大きく異なっている。まず、１小節の符割りが細かい。拍を越えた、付点のリズムも出てくる。さらに、テンポがゆったりしている。こうなると、赤ん坊を抱く身には３拍子感は薄れ、１拍ごとの縦ノリになってきて、背中を叩きながら歌うのにちょうどよいわけだ。しかも♩=60という指定は、テンポの点でも理想的である（譜例３）。

今回の調査に挙がった３拍子の曲は、《赤とんぼ》のほかに《海》、《ふるさと》、《ぞうさん》などであった。いずれもゆったりした３拍子で、縦ノリの子守歌として使用可能なものである。これらを除くと、あとはすべて２拍子か４拍子で、２本足で立って行う作業のためには、適切な選択といえるだろう。

３．３　少ない短調

今回のレパートリーに見られるもう一つの音楽的特徴は、短調が非常に少ないことである。寝かし付けの時に歌うとして挙げられた全184曲のうち、短調のものは７曲にすぎなかった。《江戸の子守歌》や《島原の子守歌》といった日本音階による曲は、長短調で説明できないので、そのような10曲は除外するとしても、この少なさは想像以上であった。

この偏りがたいへん気になり、試みに、NHK 教育テレビの子ども向け番組で放映される歌について、その調性を調べてみた。今回の調査でもしばしばコメントされた人気番組、「いないいないばぁ」と「おかあさんといっしょ」という２つの番組を対象に、2002年３月７日から４月６日までの１ヶ月間に渡って調査したところ、87曲の歌が登場した中で、短調の歌はわずかに５曲であった。子育て中の家庭に非常に大きな影響力を持つこれらの番組で、ここまで長調に比重が置かれていることは、問題ではないだろうか。さらに、小学校の音楽の教科書を見ても、短調が非常に少ない情況であることに変わりはない。もしかして日本では、子どもには明るく楽しい歌がふさわしい、と考えられているのだろうか。そして、明るさ楽しさは長調で表現すべきで、短調は暗さ悲しさに結びつくから子どもにはふさわしくない、と信じ込まれているのだろうか。

確かに、明治時代にはそのような考え方が通用していた。西洋音楽が日本に導入される際、音楽取調掛の伊沢修二などは、長調は勇壮さを発育させ、子どもの教育上善いと述べており、一方

の短調は憂鬱で、子ども、特に男子に与えるべきではない、と主張している（北川1999：188－189)。日本の音楽教育においては、スタート時点からこうした「調差別」が起こっていたことは注目すべきである。

その後、「子ども」は次第に「男子」へと置き換えられてゆき、大正時代には、勇壮な長調と男子、軟弱な短調と女子を結びつける考え方が定着したという。先の北川は、この事例をジェンダー論として展開し、60年代のテレビ漫画主題歌の分析をしているのだが、それによると、当時の（男の子向き）「宇宙もの」漫画の主題歌は長調のみだったのに対し、女の子向き漫画の主題歌には短調が目立つ。まさに調性はジェンダー化されていたのである。ただ、当時のテレビ漫画主題歌というレパートリーにおいては、ジェンダーの問題をはらんでいたとしても、長調と短調はそれなりに存在していたわけである。この北川論文にヒントを得て、現代のテレビアニメの主題歌を注意して聴いてみると、男の子向き、女の子向きを問わず、短調のものが散見される。特にヒーローものに短調が目立つが、アップテンポでノリの良い作りになっているため、受ける印象は、勇ましく、元気のよいものである。

こうして長調やテンポの速い音楽に偏ることは、既に日本に蔓延しつつある、明るく、元気で、勇ましいことをよしとする画一的な子ども観を助長することになるのではないだろうか。たいていの子どもは、放っておいても元気なものである。むしろ、短調の調べに耳を傾けることのできるゆとりがほしい。短調とは、悲しいとか怖いとかいう情緒的側面のみから、説明されるべきではない。長調についても同様で、明るく楽しい面ばかりが長調の持ち味ではない。大切なことは、二つの調は異なった響きがする、というごく当たり前のことである。響きの違いを味わうためには、テンポや、興味をひく歌詞や、激しい踊りに気を取られずに、ゆったりと音に耳を傾けることが必要である。そして、家庭で子守歌が歌われる時間こそ、そのようなゆとりが生まれるはずである。日本で聞くことのできる音楽は、西洋音楽と、西洋の理論で作られた音楽ばかりであり、さらにその中でも、長調が短調を脅かそうとしている。何事においても、ひとつに偏るのは健全とはいえない。ぜひ、子どもの頃からいろいろな響きに親しんでおくべきであろう。

３．４　選曲の心理

今回の調査で挙がってきたレパートリーの大半が、童謡や子どもの歌で占められていたわけだが、選曲の際に働く心理として、身体の動きに沿った曲、歌詞が平易で音域が広くなく、リズムも単純な曲、という条件が考えられることは前に述べた。ここでは、そのほかに考えられる選曲のきっかけを挙げてみよう。それが必ずしも歌い手によって意識されているとは限らないが、レパートリーを見る限り、次のような歌は選ばれやすいと考えられる。

３．４．１　「親と子」「母と子」がテーマになっている歌

人気があった上位10曲のレパートリーのうち、１，２，６位の《江戸の子守歌》、《ゆりかごの歌》、《シューベルトの子守歌》は、子守歌のジャンルに含まれるため除外するとして、残りの７曲の中では、《ぞうさん》、《七つの子》、の２曲が、さらに上位20曲まで広げてみると、《おう

ま》、《小鳥のうた》がこれにあてはまる。

３．４．２　「夜」のイメージがある歌

《ゆうやけこやけ》、《赤とんぼ》、《きらきら星》などがある。周囲の状況に誘発されるのだろう。

３．４．３　「替え歌」の要素があるもの

《江戸の子守歌》、《ぞうさん》、《さっちゃん》などは、子どもの名前を入れて替え歌が歌われている。《江戸の子守歌》では、「坊やはよいこだ」の歌詞の「坊や」の部分に自分の子どもの名前を入れる。《ぞうさん》では、２番の歌詞を「○○ちゃん○○ちゃん　誰が好きなの」と変えたり、「あのね○○ちゃんが好きなのよ」というように、○○のところに子どもの名前を入れる。《さっちゃん」》では主人公を自分の子どもにするわけだ。

３．４．４　「季節の歌」を意図的に

アンケートにも多くの記述があったように、歌い手はその時々の季節の歌を取り入れようとしている姿勢が伺えた[8]。回答にあった歌を季節ごとにまとめてみると、次のようになる。

春の歌……《うれしいひなまつり》　《春がきた》　《ちゅうりっぷ》　《こいのぼり》　《茶摘み》　《めだかの学校》　など

夏の歌……《かたつむり》　《七夕》　《海》　など

秋の歌……《まっかな秋》　《里の秋》　《ちいさい秋みつけた》　《赤とんぼ》　など

冬の歌……《冬じたく》　《ジングルベル》　《あわてんぼうのサンタクロース》　《赤鼻のトナカイ》　《お正月》　《雪》　《たき火》　《北風小僧の寒太郎》　など

３．５　「替え歌」と自作の歌

子守歌を伴う寝かしつけの場面とは、本質的に口頭伝承の文化であり、「書かれたもの」に拘束されない、自由な音楽行動の場である。そこでは、状況に合わせた「変化」が容認され、歌がプライベートな所有物として意識され、受け継がれていく可能性を含んでいる。今回の調査で興味深かったのは、そんな自由な環境ならではの、創意工夫の発露が見られたことである。

まず、「自作の歌を歌う」と答えた人が17人いた[9]。337人のうちの17人なのでその数は決して多いとは言えないが、そこには生き生きとした音楽文化本来の姿が見られる。歌を作るという行為は、歌うのと同じように自然な営みである。たとえでたらめでも、オリジナルの歌を聞かせてやることで、子どもに「自分だけの」歌がある満足感を与えることができる。さらに、それが次の世代に受け継がれていけば、家庭の伝統を形成することができる。

また、何の歌なのかわからないが、何となく歌い継いでいる例があった。たとえば、次の二つのコメントは、両方とも福井に伝わる子守歌の断片についてのものだが、両者ともそうは認識していない。「よくわからない歌」なのだが、わからないなりに、家に伝わっている様子を伺い知ることができる。「私の父が勝手に作った歌なのか、なんなのか、よくわからない歌。『ねんねんやー、おべころやー』というのをずーっと繰り返す（＃162）。」「歌というのか題もわかりま

せんが、『ねんねんや〜おころりや〜〇〇ちゃんが寝たまにおまま炊いて〜〜』という、私がおばあちゃんに歌ってもらっていたもの。このわけのわからない歌を、１才７ヶ月の子どもも、自分のぬいぐるみに歌っています。３人［この方はお子さんが３人］とも自然にこの歌を歌います（＃102)。」 後者の例では、少なくとも４世代に渡って歌が受け継がれていることがわかる。このように、何だかわからないけれど誰かの「声」が記憶に残っている、というのは、たいへん幸せなことだろう[10]。

さらに、前述の「替え歌」は、「変化」を体現するものであり、現在主流のコピー文化に対して、自由度の高い、主体的な歌文化の一面を見せるものである。

４．レパートリーの出所

今回の調査では、実に184曲もの歌が子守歌として用いられていた。筆者は当初、これだけレパートリーに幅があることを予想していなかったこともあり、日本の伝統的な子守歌の入手先は尋ねたものの、他のレパートリーがどこから来るのか、目配りすることを怠ってしまった。それゆえ、ここでは、調査から読みとれることを中心に、レパートリーの出所について論じ、その他の可能性についてはいくばくかの仮説を述べることにする。

まず、日本の代表的な子守歌の入手先について検証してみよう。「知っている」と回答した人は全体の67%で、その入手先については「母親」と「祖母」が合わせて49%となり、半数近くになる。母親や祖母が実際に自分やきょうだいに歌ってくれたのを覚えている場合もあれば、母親が自分の子ども（母親にとっては孫）に対して歌っているのを、現在、日常的に聞いている場合もあると考えられる[11]。これは最も自然な家庭内伝承のありかたである。それでも、レパートリーに地域性は見られず、「伝統」も全国レヴェルになっている。「学校」も13%の人が挙げていた入手先である。《江戸の子守歌》が、福井市でも、埼玉県朝霞市でもよく知られているのは、この曲が、昭和27年以来継続して小学校の音楽の教科書に掲載されてきたことも、大きな要因であろう。

さて、「伝統的でない」子守歌の入手先については、テレビの歌、童謡・子どものうた、の順に私見を述べていこう。まず、テレビの子ども番組についてだが、予想通りの人気で、テレビから入手したと考えられる歌が挙がっていたのは全体の18%になった。「まんが日本昔ばなし」のテーマソングなどは、「日本の伝統的な子守歌」に数える人もあるほどで、次世代の子守歌として今後歌い継がれていきそうな気配である。NHK 教育テレビの「いないいないばぁ」から生まれた、《ねむねむファーオ》という歌も同様である。

数ある子ども番組の中でもよく見られているのは、先に挙げた「いないいないばぁ」と、同じく教育テレビの「おかあさんといっしょ」である。アンケートのコメントにもあるように[12]、大人が忙しい時間帯に放映されているので[13]、テレビが付けっぱなしになってしまう家庭も見受けられる。これらの番組で、どのようなレパートリーが提供されるかを調べてみた。先の短調の調

査と同様の時期、すなわち2002年３月７日から４月６日までの１ヶ月間のレパートリーを見ると、番組オリジナルの歌のほか、既成の童謡・あそびうたの類がときおり放送されることがわかった[14]。両方の番組で毎日放送されるそれぞれの「たいそう」を除いた87曲のうち、19曲が既成の童謡やあそびうたであり、その割合はおよそ20%である。したがって、これらの番組は、新しい歌を提供する一方で、大人世代に童謡を思い出させてくれる役割をも、担っていると言えそうだ。実際、現代でも子守歌として人気の高い《ゆりかごの歌》も、2002年に入ってから「いないいないばぁ」で何度か放送されているのを聞いたことがある。

「日本昔話」の歌や《ねむねむファーオ》が、何年か後には子守歌のスタンダードになる可能性があると先に述べたが、考えてみれば、テレビの子ども番組は既に50年の歴史を持っている。番組初期に生まれた歌は、もはやスタンダードとなっている。たとえば、上の例で既成の童謡・あそびうたに含めた「あめふりくまのこ」は、昭和37年にNHKのテレビ番組「うたのえほん」で発表されたものである。こうしてみると、テレビの子ども番組は、未来の共有財産の供給源となっていると言えそうである。共同体や家庭で独自の伝統を伝えてゆくシステムが失われつつある現在、それに代わる新しい伝統の発信源がテレビということになるのかもしれない。

さて、現代子守歌の大きなレパートリーを形成する、童謡や子どもの歌であるが、現在の親世代は、幼稚園・保育園から学校を通じての教育の過程で、あるいは、日常の生活において、何となく身に付いているものだ。その記憶が、テレビの子ども番組や子供向けのCDやビデオ、街のスーパーマーケットでかかるBGM、子どものベッドサイドで鳴るオルゴールやベビーメリー[15]、などによって呼び起こされ、再び定着し、口をついて出てくるのだろう。また、童謡の絵本なども出版されており、それを読み聞かせながら歌っている人もいた[16]。

むすび

子どもに対して歌を歌わない、ととかく批判されがちな現代の子育て世代は、実は歌うことを全くやめてしまったわけではないことがわかった。ただ、そのレパートリーはいわゆる「子守歌」ではなく、子どもの目線に合わせた童謡や、子どもの歌である。以前の子守歌なら、大人が子どもに語りかけたり、あるいは大人がそのまま内容における主体でもあったりしたわけだが、今では歌の内容そのものが子どもの世界であり、それを大人が代弁しているといった構造になっている。

子守歌は、単に子どもが鑑賞するためのものではなく、大人が寝かしつけ労働をする際の作業歌である。したがって、労働のリズム、すなわち、子どもを抱いたりおぶったりして体をゆするという運動に自ずから適合したレパートリーが選択されている。レパートリーに懸念すべき点があるとすれば、長調の歌への異常な偏りであろう。２つの調性に賦与されるステレオタイプなイメージと、明るく元気という型にはまった子ども観を再考し、様々な音楽を受容する感性を育てるべきである。

伝承という側面から子守歌を考えると、いわゆる「伝統的な」ジャンルが姿を消しつつある現在、地域の共同体で、独自のレパートリーが口頭で伝承されるという従来の方法は、もはや過去のものと言わざるを得ない。それに代わって、地域性の薄い童謡や子どもの歌が、書かれたものやマスメディアを介して受け継がれていくという予測ができる。しかし、その伝承のしかたは、共同体を離れ、非常に個人的な、家庭内的なものになるだろう。「家庭内での伝統」は、今後どのように作られていくのだろうか。数十年前なら、年の離れたきょうだいがいたり、母親以外の子守りがそばにいたりしたので、だれかがだれかに子守歌を歌っているのを聞くこともできた。しかし、現在は少子化の時代であり、そもそも今の子育て世代が、自分やきょうだいのために誰かが歌ってくれた記憶を、具体的にもっていないことが多い。子どもの名前を入れた替え歌や、自作の歌が歌われていることからは、音楽が本来持っているダイナミズムを感じることができるが、そこから「家庭内伝統」を紡いでいくことはなかなか難しそうだ。

とはいえ、最近興味深いことがあった。ある学生に、自分の子どもにどんな子守歌を歌ってやるつもりか質問したところ、《ちゅうりっぷ》という答えが返ってきた。自分の母親が歌ってくれたから、というのがその理由であった。この学生の家庭では、《ちゅうりっぷ》という童謡を中心に、新しい「家庭内伝統」が築かれつつあるようだ。日本古来の子守歌が歌われなくなっていることを嘆くよりも、寝かしつけあるいは子育てという場に歌が入り込む余地があることを、積極的に考えていくべきだろう。

注

⑴　守り子とは、文字通り「子守りをする人」のことだが、特に江戸時代中期から昭和初期にかけて存在した、奉公の子守り人を指す場合が多い。奉公守り子は、金銭取引を伴う、期限付きの身売りであり、通常７，８才から13才ぐらいの女の子が、半年や１年を単位としてよその家に住み込み、子守りをする。遊びたい盛りに１日中子守りをし、子守り以外の労働もこなし、基本的には里帰りすることができないため、大きな重圧感を伴った。いわゆる「守り子歌」には、そんな過酷な生活を嘆く歌が多い。

⑵　雑誌『ユリイカ』1981年８月号では、子守歌の特集が組まれている（清水：1981）。分野の異なる18人の著者による小論集は、まさに学際的な様相を呈している。

⑶　朝霞市は筆者の実家があるため、福井市と同時期に調査を試みたが、地域的な差は全くなかったため、本稿では特に区別を設けず、すべてのサンプルをまとめて扱っている。

⑷　何をもって「伝統」とするか、ということに関しては、様々な議論が可能であるが、通常は、ある音楽の様式が、現在の担い手によって保たれている状態を指す。そのためには、必然的にある程度の時間が必要になるが、どれほどの時間を経れば「伝統」と認められるかは、その地域や音楽様式によって異なるだろう。日本という地域の、子守歌というジャンルにおいて、それを伝統と見なす場合の一般的な了解事項として、ある程度の時間に加えて、作者の匿名性、地域性、具体的でないタイトル、などが要求されるようである。たとえば、《江戸の子守歌》、《島原の子守歌》、《五木の子守歌》、《中国地方の子守歌》といった具合である。ただ、《島原の子守歌》は宮崎康平の作詞作曲、《中国地方の子守歌》は山田耕筰の編曲、《五木の子守歌》は事実上尾上和彦作曲である。単に地域の名を冠しているだけのタイトルが、作り手の存在をもぼやかしてしまっている

ようだ。この設問に対しては、上記のようなレパートリーが期待されたが、実際はほとんど出てこなかった。

⑸　「童謡」とは、つまるところ子どもの歌なのだが、作り手のわかっている「創作もの」であるところがわらべうたや民謡と大きく異なる点である。童謡には、大きく分けて次のような３つの流れがあると考えてよいだろう。まず、童謡という言葉がはじめて用いられた、「大正芸術童謡」時代の作品で、《ゆりかごの歌》などはその典型である。次に、昭和のラジオ・レコード時代の「レコード童謡」で、《ゆうやけお月さん》などがこの例である。当時の童謡には、『チャイルド・ブック』のような幼児雑誌が、歌詞の発表媒体として大きく貢献した。そして戦後になると、テレビを通じて子どもの歌が数多く発表されるようになった。古いものは、次第に作者の存在も発表の経緯に関する記憶もぼやけてきている。そのうち、日本国民の一般的な心情においては、順に「伝統」の仲間入りをするのであろう。

⑹　「早く寝て！」のような書き方でいらいらを表現する人が多かった。たとえば、次のコメントの前半のように。「『早く寝てくれー』という感じ（一言で言えば...）でも、近頃は、子どもの方が私に対して「ねんねんやー」と言ってねかしつけるまねをします。とってもうれしいですよ（＃143）。」 次の３つは、焦りの気持ちと穏やかな気持ちの両面を記したものである。「自分をまず落ち着かせる為もあります。歌はたまにしか歌いませんが、『いつもこうおだやかだったらなー』と思います（＃102）。」 「やさしい母親のような感じ。早く寝かせて自分も休みたい（＃103）。」 「寝ぐずりで泣いている時は、『早く眠ってしまいなさい！』といいたいくらいつらいときもあった。子守歌を聴きながらうとうとする子どもの顔を見ていて、幸せを感じました（＃106）。」 次の例などは、所詮寝ないことがわかっていて苦笑い、といったところである。「歌っても寝ない。それどころか喜んで手をたたいたりする（＃332）。」

⑺　キリスト生誕を子守歌で描くという手法は、西洋においては一般的である。子守歌が３拍子なのは、ゆりかごのリズムに近いことのほかに、「三位一体」の「三」に由来するものであるとも考えられる。また、音楽史的にみて、２拍子よりも３拍子の方が歴史が古く、２拍子に比べて完全な（これもまさに三位一体説による）ものとされていた。歴史的に古いジャンルであろう子守歌が、３拍子に基礎をもつことは、このような点からごく自然なことと考えられる。

⑻　回答の例を挙げると、「童謡の他に、その季節、そのイベント、たとえば、今だったら《おひなさま》の歌を（＃211）。」 「そのときの季節の歌。春なら春の花咲く歌とか、CD なども出ているよくある『よい子のどうよう』みたいな物（＃234）。」

⑼　オリジナル歌については、こんなコメントがあった。「そのとき、子どもの名前を入れてつくった歌なので...２度と歌えません？！（＃332）」 「即興で、子どもの名前を入れて作った歌。『○○ちゃんはいいこちゃんだ、ねんねしな。』（＃315）」

⑽　肉親の肉声の記憶は、うれしいものである。＃160の回答者は、ナツメロを子守歌代わりに歌ってもらったことを思い出し、アンケートの問４に対し、次のように答えている。「母に歌ってもらったナツメロです。《経験》《くちなしの花》《白い蝶のサンバ》《真夜中のギター》。大人になって、カラオケでなぜか歌えたのでびっくりしたことがあります。あとで母のおかげだとわかりました。」

⑾　やはり自分自身に歌ってもらった記憶よりも、少し大きくなってから、ほかの子どもに向かって歌われるのを聞いた方が記憶に残りそうである。たとえば、「おばあちゃん。おばあちゃんがいとこを預かっていたときに歌っていた（＃12）。」とか、「自分に、というよりは弟に歌っていたときの記憶かもしれません（＃15）。」など。

⑿　「教育テレビの AM７：30～９：00まで、毎日見ているので、その中の歌などを歌います。後は、再放送も見てます。その歌を参考にしてます（＃89）。」

⒀　2002年７月１日現在、NHK 教育テレビの子ども番組の放送時間は、「いないいないばぁ」が午前８時11分か

ら８時26分まで、「おかあさんといっしょ」が午前８時31分から９時までである。再放送は、それぞれ、午後４時から４時16分まで、午後４時21分から４時まで。

⑭　この期間に放映された、「いないいないばぁ」「おかあさんといっしょ」のために作られたのではない、「既成の」童謡・あそびうたは次の通り。(　)内数字は放映回数、ないものは１回放映されたものである。《ないしょ話》(４)　《はるがきた》(３)　《ちゅうりっぷ》(２)　《おすもうくまちゃん》(２)　《うさぎのダンス》(２)　《りんごのひとりごと》(２)　《こんこんクシャミのうた》　《汽車ポッポ》　《おおきな古時計》　《クラリネットこわしちゃった》　《とんとんともだち》　《バスごっこ》　《おべんとうばこ》　《おうま》　《ドロップスのうた》　《山の音楽家》　《ぞうさん》　《むすんでひらいて》　《ぶんぶんぶん》

⑮　「いつも使っているメリーゴーランドの曲（#94)」、「ベビーメリーの曲だったから(#99)」というコメントを受け、日本の育児用品メーカー３社から発売されている13の商品について、その収録曲目を調査した。(　)内数字は収録されている商品の数である。ないものは１商品にのみ収録。《ブラームスの子守歌》(10)　《ゆりかごの歌》(６)　《メリーさんの羊》(３)　《イッツ・ア・スモール・ワールド》(２)　《ロック・ア・バイ・ベイビー》」(２)　《アニー・ローリー》　《おおスザンナ》　《村の鍛冶屋》　《きらきら星》　《スワニー河》　《ローレライ》　《モーツァルトの子守歌》。どういうわけか圧倒的に西洋の曲が多い（日本の歌は《ゆりかごの歌》のみ)。全体的に意図がよくわからない選曲である。

⑯　童謡の本にのっている絵を見せながら歌ったから(#90)。」という回答もあるように、童謡の歌詞が掲載された絵本が出版されている。たとえば、『みんなでうたおう　どうようえほん』１～４（ひかりのくに、1997)、ましませつこ絵『おかあさんとこどものあそびうた』(こぐま社、1994, 1996）など。

参考文献

北川純子編
　1999　『鳴り響く性－日本のポピュラー音楽とジェンダー』(東京：勁草書房)
北原白秋編
　1974　『日本伝承童謡集成』第１巻子守歌編（東京：三省堂）
柴田南雄
　1978(1980[2])　『音楽の骸骨のはなし－日本民謡と12音音楽の理論』(東京：音楽之友社)
清水康編
　1981　「特集＝子守唄」『ユリイカ』８月号、58－136.
日本放送協会編
　1955－1980　『日本民謡大観』全７巻（東京：日本放送出版協会）
松永伍一
　1964『日本の子守唄』(東京：紀伊国屋書店)
右田伊佐雄
　1991『子守と子守歌－その民俗・音楽』(大阪：東方出版)
渡辺富美男・松沢秀介
　1979　『子守歌の基礎的研究』(東京：明治書院)

付録　質問紙見本

「子守歌に関するアンケート」のお願い

平成13年10月１日

こんにちは。わたくしは、福井市在住で、福井大学で音楽を担当している者です。
今、育児に頑張っていらっしゃるお母さんたちと、「子守歌」の関係について調査・研究しています。毎日の育児でお忙しいことと思いますが、もし手の空いた時間があれば、気分転換にアンケートにご協力ください。返信用封筒にて、１週間以内をめどにご投函いただければ幸いです。
なお、ご質問、苦情等ございましたら、福井市保健センターではなく、直接わたくしまでお寄せくださいますよう、お願いします。

まず、次のことを教えてください。

・あなたの年齢　（　　歳）
・お子さんの年齢　第１子（　　才　　ヶ月）
　　第２子（　　才　　ヶ月）
　　第３子（　　才　　ヶ月）
・現在、仕事をしていますか？　（している・していない）
・お子さんの世話をするのは主にどなたですか？
　（自分・夫・保育士・自分の母親・夫の母親・それ以外の方［　　］）

１．あなたは、お子さんを寝かしつけるときに、歌を歌ったことがありますか？
　（はい・いいえ）
「はい」と答えた方は、引き続きお答えください。
「いいえ」と答えた方は６の質問に飛んでください。

２．それは、どのような状況でしたか？これまで経験した状況をすべてお書きください。
　（ａ．寝ぐずりで泣いているお子さんを立って抱っこして
　　ｂ．寝付きそうなお子さんを立って抱っこして
　　ｃ．寝付きそうなお子さんを寝かした状態で
　　ｄ．寝付いたお子さんに対して
　　ｅ．その他［　　］）

３．そのときのあなたの気持ちを一言でいうとどんな感じでしたか？

４．そのときなんという歌を歌ったか教えてください。いくつでも結構です。
　その中で、お子さんがすぐに寝てくれるという歌があれば、○をつけてください。

5．なぜその歌を選んだのでしょう。あてはまるものに○をつけてください。
（a．無意識のうちに　b．その歌が好きだから　c．子守歌だから
d．その他［　　］）
6．あなたご自身は子守歌を歌ってもらった記憶がありますか？　（ある・ない）
「ある」と答えた方は、曲名がわかれば教えてください。
7．日本の伝統的な「子守歌」で、ご存じの歌がありますか？　（はい・いいえ）
「はい」と答えた方に伺います。
7－1．曲名を教えてください（いくつでも）。その中で、1番だけでも歌詞をつけて歌えるものがあれば、○をつけてください。
7－2．その歌をどこで知りましたか？　誰に教えてもらいましたか？
8．あなたは育児にストレスを感じることがありますか？（ある・ない）
「ある」と答えた方は、その原因は何だと思いますか？　あてはまるものにいくつでも○をつけてください。
（a．夜泣き、授乳など、育児上の困難
b．自分の時間がとれないこと
c．仕事との両立
d．夫の言動
e．姑との関係
f．その他［　　］）
9．8で「ある」と答えた方に伺います。あなたの育児ストレス解消法は何ですか？

貴重なお時間を割いていただき、本当にありがとうございました。
お子さまのすこやかなご成長を、心よりお祈りいたします。